



ルノー・カプソン (2018.3.12) © 藤本史昭

TOPPANホール26周年 2026/27シーズン オープニングコンサート

ウィリアム・ヨン (ピアノ) / 毛利文香 (ヴァイオリン) / 笹沼 樹 (チェロ)

光と影を纏う、巡礼への誘い ^{いざな} 兼重稔宏

[Message] ニルス・メンケマイヤー

パトリツィア・コパチンスカヤ (ヴァイオリン) & ソル・ガベッタ (チェロ)

白刃を煌めかす、待望のデュオ 鈴木淳史

ニコラ・アルトシュテット プロジェクト

室内楽の真髄を描き切った、完全燃焼の2日間

Review

[Schedule 2026.10 ~ 2027.3]

[Information]

Glocal Piano Festival at TOPPANホール 第66回 ブゾーニ国際ピアノコンクール 予選会

ランチタイムコンサート Vol.142 藤平実来 (ピアノ)

宮谷理香ピアノリサイタル「美」のpromナード / 第95回 日本音楽コンクール 予選

2026/27シーズン オープニングコンサート

ベートーヴェンに魅せられて

毛利文香さん、笹沼樹さんとの共演経験多数のTOPPANホールお馴染みのピアニスト兼重稔宏さんと、ウィリアム・ヨンさんと長年デュオを組み、その人柄と魅力を熟知しているヴィオリスト、ニルス・メンケマイヤーさんのお二人から、本公演に向けて熱いメッセージを寄せていただきました！



William Youn
piano



Fumika Mohri
violin

光と影を纏う、巡礼への誘い

2020年の夏、私は長く住んだドイツから帰国し、人生で初めてベートーヴェンのピアノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィーア》を人前で弾くため悪戦苦闘している最中でした。そして、ほとんど全てのピアニストが畏怖するこの巨大な存在から逃避するように、シューベルトの様々な小さな舞曲を弾いたり聴いたりしていた時に、《高雅なワルツ集 D969》を通して、初めてヨンさんの演奏に出会いました。ハンマークラヴィーア・ソナタという迷宮に迷い込み、さらにはコロナ禍の鬱屈とした空気に押しつぶされそうになっていたあの夏に、ヨンさんの透明で興行きのある音で演奏される柔らかく含みを持ったシューベルトを聴いた瞬間、心に新鮮な空気が吹き込まれ、身体がずっと軽くなるような感覚になったことを今でも覚えています。

そんな彼が軸となる今回のプログラムは、笹沼樹さんとのブラームスのチェロ・ソナタ第1番で始まります。私自身、笹沼さんとこれまで何度もステージを共にしてきましたが、彼のシンフォニックでスケールの大きな音楽づくりと、論理性と感覚的な遊びを併せ持った音楽の進め方はとても魅力的で、共演する度に、私にいつも大きな喜びを与えてくれる存在です。「ブラームスを演奏しているとき、ブラームス自身の人柄が作品から直接伝わってくることを楽しんでいる」というヨンさんが、笹沼さんと共にどのようなブラームス像を見せてくれるのか、今から楽しみでなりません。

シューベルトのピアノ・ソナタ全曲のレコーディングを2022年に完結させたヨンさんですが、当時のインタビューで「シューベルトをコンサートで弾くときは、ただ音楽の中に入り込み、そこで起きることを純粋に楽しむ——最近その

ような心境で演奏できるようになりました。(中略) このような気持ちに至るまでには、自分自身が何者であるかを受け入れることがとても重要でした」と語っています。その言葉が表すように、肩の力がストンと抜けていて、誇張がなく、シンプルに、自然に、でも作品が内包する様々な感情や風景を掬い上げていく彼のシューベルトの演奏は、私にとってとても魅力的です。

今回彼が演奏するソナタは、シューベルトがピアノで描いた《Pilgerweise〈巡礼の歌〉》ともいえる《ピアノ・ソナタ第20番 D959》。12年ぶりに日本で演奏するヨンさんと共に、シューベルトが歩んだ道を巡礼することは、聴き手にとってもきっと深い意味を持つことになるでしょう。

休憩を挟み演奏されるシューベルトの《ピアノ三重奏曲第2番 D929》には毛利文香さんが加わります。私自身、毛利さんとも今まで多く共演してきましたが、彼女の、作品の本質を直感的に捉える感性と知性、一見クールに見える彼女の内側からあふれ出る巨大なエネルギーから多くのインスピレーションをもらい、これまでも舞台上でたくさんの特別な瞬間を経験させてもらいました。

このトリオは、ベートーヴェンが亡くなった1827年3月26日の約半年後の秋、彼のお墓にシューベルトの兄フェルディナントがデザインした墓標が捧げられた時期に作曲されました。第1楽章は楽聖の記念すべきOp.1-1（ピアノ三重奏曲第1番）と同じ変ホ長調で書かれており、その偉業を讃えるかのような英雄的な性格を帯びています。ハ短調の第2楽章は「高い山の向こうに美しい希望が去っていく」というスウェーデン民謡に基づく葬送行進曲風の楽章です。私は

ピアニスト 兼重稔宏

この音楽を演奏していると、ベートーヴェンの最後のピアノ・ソナタOp.111第1楽章や、交響曲第7番の第2楽章、そしてシューベルト自身の《冬の旅》第1曲《Gute Nacht（おやすみ）》を想起することが度々あります。また、第4楽章に光と影を与える印象的な連打や、永遠に続くかのような転調の旅路を辿っていると、ベートーヴェンの墓標が捧げられた際に読まれたフランツ・グリルパルツァーの弔辞の一文である次の言葉がふと頭をよぎります。

「死すべきものは旅立ち、星座となって夜空に瞬く。今をもって彼は歴史となった。これからは彼について語るのをやめ、私たちに語ろう」
第2楽章で語られる「美しい希望」とは何であったのか、シューベルトにとってこの作品はどのような意味を持っていたのか、様々なことに思いを巡らせずにはられません。

“Ich liebe Schubert über alles.”

「私はシューベルトを何よりも愛している」と語るヨンさんが、笹沼さん、毛利さんと共に、私たちをどのような旅に連れ出してくれるのか——10月1日にTOPPANホールにてみなさまと共に体験できることが心から楽しみです。

TOPPANホール26周年 2026/27シーズン オープニングコンサート

2026年10月1日(木) 19:00

ウィリアム・ヨン（ピアノ）

毛利文香（ヴァイオリン）／笹沼 樹（チェロ）

ブラームス：チェロ・ソナタ第1番 ホ短調 Op.38

シューベルト：ピアノ・ソナタ第20番 イ長調 D959

シューベルト：ピアノ三重奏曲第2番 変ホ長調 D929

6,500円／U-25 3,000円 全席指定

特別協賛：株式会社 安藤・間

※21:20頃終演予定

Artist Message

ニルス・メンケマイヤー (ヴィオラ)

謙虚さと内なる声に耳を澄ます

ウィリアム・ヨンについて、私自身の言葉でお話しできることを大変嬉しく思います。彼は、ピアニストとしての洗練された技術もさることながら、音楽に向き合うその独特のアプローチゆえに、私が心から敬愛している音楽家です。

初めて彼のシューベルトを聴いたとき、単にピアニストが作品を演奏しているのを聴いているのではなく、彼と一緒に音楽に耳を傾けているように感じたのです。そこには、魅せるための技巧の誇示は一切ありません。彼はまるで、音楽が自然に、透明に、そして深い内的な誠実さをもって通り抜けていくための媒介のようでした。これこそが、彼が特別なピアニストと評される所以です。彼はとりわけモーツァルトとシューベルトの卓越した解釈で知られていますが、これらのレパートリーでは、均衡、呼吸、タイミング、そして真実味のすべてが重要になります。効果や技巧の陰に隠れることを許してくれない作曲家たちです。彼の演奏は、大いなる謙虚さをもってこの音楽に向き合う一方で、非常に強い内なる声も備えています。

このような理由から、彼が室内楽奏者としても引く手あまたで、多くの人々に深く愛されているのも納得です。彼にとって、音楽をつくること、耳を澄まして聴くこと、ともに呼吸を合わせることで、そして音を生み出すことは、決して別々のものではありません。それらは一つの完全で完璧な

Review ニコラ・アルトシュテット

2023年2月の無伴奏リサイタル後、ワイングラス片手に出演の相談をしたのが、本プロジェクトのはじまりだった。当初私が描いていたプランは、デュオ・リサイタルと《ドゥムキー》を核に据えた東欧の民族系のプログラムを含む3公演。《ドゥムキー》こそドヴォルジャークの最高傑作だと思いながらも納得できる演奏に出会えなかった私が、遂に出会い、確信を新たにしながら彼のCDだった。そしてそこにはもっと深い意味も隠されていたことを知るようになる…。

「アホネンとはデュオの経験がない」と不安を見せていたが、長年のパートナーのように息の合った掛け合いを第1夜で聴かせてくれた。アルトシュテットの極めて的確で音楽的な提案の数々と、それを高い次元で咀嚼して演奏にすぐ反映させることができるアホネンの凄腕の勝利でもあった。

第2夜はN.ブーランジェ《3つの小品》で幕開け。第1夜のデュオの延長線上にあることを意識づけさせるうえでも効果的な選曲だった。ショスタコーヴィチは演奏される機会のない不遇な





Tatsuki Sasanuma
violoncello

Patricia Kopatchinskaja



Sol Gabetta

白刃を煌めかす、待望のデュオ

鈴木淳史

「この曲はこの演奏でなければ！」というマイルールごときものが、自ずと出来てしまうことがある。先入観には違いない。ただ、そんなふうに思わせてしまうだけのインパクトに一度打たれてしまったら、後戻りはいいよ難くなる。

コパチンスカヤとガベッタが演奏するラヴェルの《ヴァイオリンとチェロのためのソナタ》の録音を聴いたとき、即座に「この曲はこの演奏でなければ！」という思いが胸を貫いた。作曲家が込めたハンガリーの民族色がこれほどまでに濃厚に現れた演奏はあったろうか。なんといっても、ヴァイオリンとチェロが、互いにキョーレツな表現力の白刃を煌めかせながらの、丁々発止の掛け合い。ラヴェルの音楽がもつ、ロマン派や民俗音楽といったエッセンスに加え、現代音楽だって見据えたような幅の広すぎる世界がそこに現れたのだった。

その演奏を最高の環境で体験できる。今年10月、TOPPANホールでのコパチンスカヤとガベッタのデュオ・リサイタルで、この曲が演奏されるのだ。

今さら「鬼才」と書くのがためらわれるほどに、ぶっちぎりの個性で客席を沸き返らせてきたモルドバ生まれのヴァイオリニスト、パトリツィア・コパチンスカヤ。これまでも、ソロやデュオ、さらにはカメラータ・ベルンを率いてTOPPANホールに登場、クラシック音楽のルーツにある、民族性をヴィヴィッドに掻き立てる演奏で圧倒してきた。

アルゼンチン生まれのチェリスト、ソル・ガベッタはこのホールには19年ぶりの登場となる。2007年に、天逝した才人ピアニスト、ミハ

エラ・ウルスレアサとともにベートーヴェンやラフマニノフのチェロ・ソナタを弾いている。

ガベッタの表現のスケール感は驚異的だ。ロマンティックな抒情を濃厚に奏でたかと思うと、跳ねるようにリズムを踊らせる。その魔術のような千差万別の弓使い。

20年以上の付き合いがある2人。実は、コパチンスカヤのTOPPANホールでの初舞台は、ガベッタとのデュオ公演だった。2006年11月にKAJIMOTO主催の演奏会で、ヘンデルの《パッサカリア》やコダーイの二重奏曲を演奏している(当時アーノンクールの久々の来日に浮かれてしまい、こんな大事な機会を聴き逃していたのはわたしだけではないだろう)。

そのデュオが20年ぶりにやってくる。今回は、バラエティ豊かな小品を配置したプログラムで、ラヴェルの《ヴァイオリンとチェロのためのソナタ》とコダーイの《ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲》の2曲をメインに据える。ともに、濃密なアンサンブルのなか、民族色が鮮やかに浮き上がる演奏が期待できよう。

プログラムは、ルクレールの《タンブーラン》で開始。ホールにいきなり村の楽士たちが乱入したような騒がしいばかりの愉悦感によって、彼女らの独特な世界へと引きずり込まれることは間違いない。

ヴィトマンの《ヴァイオリンとチェロのための24の二重奏曲》からは2曲。さまざまな様式がごちゃ混ぜになって響く作風だが、〈英国風小トッカータ〉では、「007」のテーマが差し挟まれるといったユーモアも。J.S.バッハとC.P.E.バッハの

鍵盤作品からの編曲は、ピツィカートも多用、2つの声部の絡み合いに耳を傾けたい。

スペインの作曲家フランシスコ・コーイの《リゾマ(地下茎)》は、タイトルの通りに2つの楽器がぐねぐねと複雑にもつれ合うようにして進む。パトコップ(作曲家としてのコパチンスカヤの名前)の《Ghiribizzi》は、なぜか新ウィーン楽派風。ギリシアの舞曲をモチーフに、ノリノリのリズムで進むクセナキスの初期作品《ディプリ・ジーア》、リゲティの瞑想的で温かみのある《ヒルディング・ルーセンベリへのオマーージュ》。それぞれの作曲家のイメージを裏切るようなテイストの作品が並ぶのも興味深い。

火花を散らしたかと思えば、ねっとりとした響きが絡み合うアンサンブル。そんな刺激的で高揚感に満ちた時間が待ち遠しい。

(すずき・あつふみ／音楽評論家)

パトリツィア・コパチンスカヤ(ヴァイオリン)&ソル・ガベッタ(チェロ) 完売

2026年10月26日(月) 19:00

ルクレール:タンブーラン ハ長調
(ヴァイオリン・ソナタ Op.5-10より 第4楽章)
ヴィトマン:ヴァイオリンとチェロのための24の二重奏曲
第2集より 第8曲〈バイエルン風ワルツ〉/
第11曲〈英国風小トッカータ〉(2008)
J.S. バッハ:平均律クラヴィア曲集 第1巻
第15番 ト長調 BWV860より 前奏曲
フランシスコ・コーイ:リゾマ (2017)
ラヴェル:ヴァイオリンとチェロのためのソナタ
J.S. バッハ:2声のインヴェンション BWV772~786より抜粋
パトコップ:Ghiribizzi (2020/21)
リゲティ:ヒルディング・ルーセンベリへのオマーージュ (1982)
クセナキス:ディプリ・ジーア (1951)
C.P.E. バッハ:鍵盤楽器のためのプレスト ハ短調 Wq114-3
コダーイ:ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲 Op.7
特別協賛:東急建設株式会社

プロジェクト——室内楽の真髄を描き切った、完全燃焼の2日間

名作だが、アルトシュテットの並々ならぬ想い入れが、他の奏者に浸透していくかのような魅惑的なリハーサルを経て、全員が完全燃焼したかのような集中度の高い演奏が繰りひろげられた。演奏直後、舞台裏での彼らの満足げな表情が素敵だった。《ドゥムキー》は、ウクライナにおけるコサックの反乱から生まれた叙事詩で、《冬の旅》の終曲〈ライアーマン〉の先に広がる曲だということを解き明かし、この曲が生まれた意味と意義、真価はそこにある！という彼の日頃からの主張を、実際の演奏で納得させられた。そのどこまでも痛ましく美しい音楽は、聴き手の心に様々な感情を想起させたことだろう。この曲ではリハーサル時に積極的に音楽を主導していたアホネンが、本番では裏にまわって緻密に全体を支えていたのもとても印象に残った。すべてのリハーサルを見ているからこそ感じるができるのかもしれないが、相手の反応に応じて役割を瞬時に変えながら、ただひたすらに音楽に帰依しようとする3人の姿勢に、室内楽の真髄と、心から「音楽」を希求する優れたアーティスト魂が感じられた。

バルトークの五重奏曲は、アイデアのおもちゃ箱をひっくり返したよ

うな未整理な断片が寄せ集まった彼の初期作品だが、アルトシュテットのこの曲への傾倒ぶりはすさまじく、共演者をいつの間にか夢中にさせる魅力を持つ。完成前のアイデアの宝庫…という点が、彼の頭の中と相通じて惹かれるのかな？と勝手に思っているがどうだろうか。結果的に、この未熟な曲を5人の奏者の熱い想いで飽きることなく聴かせた彼らの音楽力には本当に舌を巻いた。翌朝早い帰国便にもかかわらず、興奮冷めやらぬ打ち上げは1時を過ぎ、お店を追い出されても離れがたく、道でいつまでもたむろっていた姿も音大生のように忘れ難い。

演奏家の技術の進歩はとどまるところを知らず、楽譜の音符を完璧に再現する演奏家にも事欠かない時代になった。その一方で、自身が楽器を弾くことは好きだが、その先にある「音楽」にも他人の演奏にも、興味も魅力も感じない演奏家が驚くほど増えているのも、また悲しい現実だ。そんな時代にあって、「音楽」がなにより好きで、「音楽」の可能性をいまでも信じ、楽器を弾く腕も超一流というアーティストの姿勢と覚悟が滲み出た二夜になったと思う。これこそが室内楽の醍醐味である。

(西巻正史／プログラミング・ディレクター)

Program

ニコラ・アルトシュテット(チェロ)
イリア・グリンゴルツ、毛利文香(ヴァイオリン)／原 麻理子(ヴィオラ)
アンナ=レナ・エルベルト(ソプラノ)／ヨナス・アホネン(ピアノ)

5/26 (火) — Duo

ベートーヴェン:チェロ・ソナタ第1番 ハ長調 Op.5-1
コダーイ:ソナティナ
ドビュッシー:チェロ・ソナタ
バーバー:チェロ・ソナタ Op.6
ブリテン:チェロ・ソナタ ハ長調 Op.65

5/29 (金) — マラソンコンサート

ナディア・ブーランジェ:3つの小品
ショスタコーヴィチ:ブロークの詩による7つのロマンス Op.127
コダーイ:ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲 Op.7
ドヴォルジャーク:ピアノ三重奏曲第4番 ホ短調 Op.90 《ドゥムキー》
ギデオン・クライン:弦楽三重奏曲
バルトーク:ピアノ五重奏曲 ハ長調 Sz23

SCHEDULE

2026.10 ～ 2027.3

主催公演

TOPPANホールチケットセンター

(10:00 ～ 18:00 土日祝休)

03-5840-2222

日時		公演
10 /	1 (木) 19:00	TOPPANホール26周年 2026/27シーズン オープニングコンサート ウィリアム・ヨン(ピアノ)／毛利文香(ヴァイオリン)／笹沼 樹(チェロ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
	5 (月) 19:00	ルノー・カプソン(ヴァイオリン) & ギヨーム・ペロン(ピアノ) ブラームス《ヴァイオリン・ソナタ》全曲 特別協賛：鹿島建設株式会社
	26 (月) 19:00	パトリツィア・コバチンスカヤ(ヴァイオリン) & ソル・ガベッタ(チェロ) 特別協賛：東急建設株式会社
11 /	16 (月) 18:30	Glocal Piano Festival at TOPPANホール
	17 (火) 18:30	第66回 ブゾーニ国際ピアノコンクール 予選会 共催：フェルッチョ・ブゾーニ・グスタフ・マーラー財団
12 /	8 (火) 19:00	フォーレ四重奏団
	9 (水) 19:00	
1 /	8 (金) 19:00	TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2027 中野りな(ヴァイオリン)／田原綾子(ヴィオラ)／伊東 裕(チェロ)／北村明日人、谷 昂登(ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社
	18 (月) 19:00	上野通明(チェロ) & レミ・ジュニエ(ピアノ) 特別協賛：株式会社きんでん

日時		公演
1 /	20 (水) 19:00	《歌曲の森》～詩と音楽 Gedichte und Musik～ 第31篇／第32篇 イアン・ボストリッジ(テノール)&ジュリアス・ドレイク(ピアノ)
	22 (金) 19:00	第1夜 ―ゲーテ・アーベント 第2夜 ―リュッケルト・アーベント 特別協賛：株式会社 安藤・間
3 /	18 (木) 19:00	ピーター・ウィスベルウエイ(チェロ) & 北村朋幹(ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社
《ランチタイムコンサート》 TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート [全席指定]		
11 /	30 (月) 12:15	Vol.142 藤平実来(ピアノ) 古への憧憬と未来への響き
12 /	24 (木) 12:15	Vol.143 的場 桃(ヴァイオリン)

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。
ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2026年8月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION

Glocal Piano Festival at TOPPANホール

第66回 ブゾーニ国際ピアノコンクール 予選会



2026年11月16日(月)、17日(火) 各日18:30
4,000円／2公演セット券 7,500円 全席指定
発売日：10月8日(木)
共催：フェルッチョ・ブゾーニ・グスタフ・マーラー財団

予選参加者	
ベ・ジェスン Bae Jaesung	ネイツ・カンプレト Nejc Kamplet
陳 坦銳 Chen Tanrui	刘 怡采 Liu Yi Cai
チョン・スンホ Chung Seungho	前川愛実 Maekawa Megumi
イワン・ドブロドロヌイ Ivan Dobrorodnyi	鉄 順順 Tie Shunshun
畠山咲菜 Hatakeyama Sakina	パトリック・ヒデオミ・タウンゼント Patrick Hideomi Townsend
金 圣恩 Jin Shengen	ヨ・ユンジ Yeo Yoonji

1949年創設の権威と歴史を誇るブゾーニ国際ピアノコンクール。2020年からは世界各地の声を反映させる「GLOCAL」プロジェクトを始動し、コンクールの新たな可能性を切り拓いています。今回は第66回コンクールの予選会として、ウィーン・コンツェルトハウスなど世界10会場で「Glocal Piano Festival」を開催。その日本会場となるTOPPANホールでは、2日間にわたり12名の若きピアニストが熱演を繰り広げます。

本フェスティバルの最大の特徴は、“音楽愛好家が審査員に”という趣旨のもと、2日間ご来場されたお客さま自身が「審査員」となり、来夏イタリアで開催されるファイナルステージに1名を送り出します。コンクールのディレクターからTOPPANホールの誇る質の高いお客さまへ寄せられた熱い期待に応え、TOPPANホールもこの挑戦をサポートします。未来の大器を見出すプロセスへ、ぜひ2日間通してご参加ください！

宮谷理香 ― 30周年を迎え、協奏と色彩が奏でる新章へ



今年デビュー30周年を迎えた、ピアニスト宮谷理香。この記念の年にTOPPANホールで2公演を開催します。テーマは「共に歩む、『美』のプロムナード」。音楽は決して一人で完成するものではなく、作品、共演者、聴き手、それぞれと対話を重ねることで育まれ、広がり深まっていくものと語る宮谷が、これまでの歩みに感謝をこめて挑む、聴きごたえ十分なプログラムとなっています。

DAY-1《ショパン！協奏曲が描く未来》では、長い時間をかけショパンの音楽と丁寧に向き合い続けてきた宮谷が、仲間たちとの共演によって新たな響きを聴かせてくれます。DAY-2《音楽と絵画、色彩の出逢い》では、絵画という異なる芸術と響き合うことで生まれる、新しい表現の可能性を探ります。室内楽、そしてソロという全く違った角度から《美》を見つめる2公演にご期待ください。

歩みそのものを味わいながら、さらなる出会いや発見を重ねていく―ここから始まる宮谷理香の新章を体感できる特別な時間、どうぞお聴き逃しなく！

表紙：ルノー・カプソン

貴公子の佇まいと、甘く艶やかな美音で聴く者の心をとらえて離さないルノー・カプソン。TOPPANホール初登場は2005年、日本デビューリサイタルでもありました。お国もの“オール・フレンチ・プログラム”で、児玉桃(ピアノ)と情熱的かつ濃密な対話を繰り広げ、客席を極上のひとときへと誘った2018年の公演より、大人の余裕と貴禄が漂う印象的なカットを。

デビュー30周年記念
宮谷理香ピアノ リサイタル「美」のプロムナード

DAY-1《室内楽》ショパン！協奏曲が描く未来
2026年10月11日(日) 14:00

クアルテット・エクセルシオ
[西野ゆか、栗津 惇(ヴァイオリン)／吉田有紀子(ヴィオラ)／大友 肇(チェロ)]
石田紗樹(ヴィオラ)／岡本 潤(コントラバス)
ショパン(小林 仁編)：ピアノ協奏曲 第2番 へ短調 Op.21(弦楽六重奏版)
第1番 ホ短調 Op.11(弦楽六重奏版)

全席指定：7,000円／プレミアム(限定40席)：9,000円

DAY-2《ソロ》音楽と絵画、色彩の出逢い
2026年11月1日(日) 14:00

徳山美奈子：序の舞
ラヴェル：水の戯れ
ドビュッシー：《映像 第1集》より〈水の反映〉／喜びの島
シェーンベルク：6つの小さなピアノ曲 Op.19
リスト：2つの伝説 S175より 第2曲〈水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ〉
ムソルグスキー：組曲《展覧会の絵》

全席指定：5,000円／プレミアム(限定40席)：7,000円

※DAY-1&DAY-2セット券 10,000円はムジカキアラでのみ取り扱い
主催・お問い合わせ：ムジカキアラ 03-6431-8186

チケットのお申し込み：TOPPANホールチケットセンター

新鋭なる、ラヴェルの彩り



聴く人の心に静かに届く「力」を秘めているのが、藤平実来というピアニストの魅力です。華やかさや強い個性を前面に押し出すのではなく、作品と丁寧に向き合い、一音一音に思いを込めて音楽を紡いでいくその誠実な姿勢は、これまでTOPPANホールのステージを聴衆や譜めくりとして十分に見つめてきた経験から紡ぎ出されたもの。多くの名演に至近距離で触れてきた藤平

が、今回自身のリサイタルのために選んだのは、ラヴェルの作品です。色彩豊かでありながら、繊細さやユーモア、どこか謎めいた表情を併せ持つラヴェルの音楽を、どのような音で描き出すのか。共演するのは、パリで学んだ同窓生のヴァイオリニスト、橘和美優。互いの音に耳を澄ませながら生まれる、瑞々しく新鮮なアンサンブル。この二人だからこそ描き出せるラヴェルの世界を、ぜひ会場でお楽しみください。

《ランチタイムコンサート Vol.142》
藤平実来(ピアノ) 古への憧憬と未来への響き
2026年11月30日(月) 12:15

橘和美優(ヴァイオリン)
ラヴェル：クーブランの墓
ラヴェル：ヴァイオリン・ソナタ

1,500円 全席指定
発売日：10月6日(火) [会員：9月29日(火)]

【TOPPANホールクラブ】
無料(ゴールド会員2枚／レギュラー会員1枚)
※電話・窓口にてお申し込みください。

第95回 日本音楽コンクール 予選

バイオリン部門	第1予選	8月26日(水)～28日(金)
	第2予選	8月29日(土)～30日(日)
	第3予選	8月31日(月)
ホルン部門	第1予選	9月2日(水)～3日(木)
	第2予選	9月4日(金)
声楽部門(歌曲)	第1予選	9月6日(日)～7日(月)
	第2予選	9月13日(日)
チェロ部門	第1予選	9月8日(火)～10日(木)
	第2予選	9月11日(金)
ピアノ部門	第1予選	9月14日(月)～18日(金)
	第2予選	9月20日(日)～22日(火・休)
	第3予選	9月24日(木)

全席自由：2,500円／回数券(4枚) 8,000円
※ピアノ・バイオリン第3予選を除く
【ピアノ・バイオリン第3予選】全席指定：3,500円

主催：毎日新聞社 NHK 会場協力：TOPPANホール
協賛：岩谷産業株式会社／株式会社INPEX

お問い合わせ：日本音楽コンクール事務局
03-3212-0187(平日10:00～18:00)

チケットのお申し込み：TOPPANホールチケットセンター

編集後記

ホール開館25周年シーズンが無事に閉幕しました。多くのアーティストとお客さまとともに、音楽の喜びをいっそう分かち合えた一年になったなかでも特別に感慨深かったのは、このシーズンをもって引退を発表したハーゲン・クアルテットとジャン＝クロード・ベヌティエが、最後の

ステージとしてTOPPANホールを選んくれたこと。両者ともに、瑞々しく力強い、生き生きと脈打つ音楽を奏でる姿に、まだまだ余力を感じる一方で、引き際の美学も感じた印象深いコンサートでした。秋からも独創性にこだわった企画が目白押しです。ぜひご期待ください。(雪)